



Title	総合的な探究の時間における高等学校から求められる 大学生サポーターの役割：大学生サポーターによる 探究活動支援への教員からの評価から考える
Author(s)	
Citation	令和6（2024）年度学部学生による自主研究奨励事業 研究成果報告書．2025
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/101253
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

令和6年度大阪大学未来基金「学部学生による自主研究奨励事業」研究成果報告書

ふりがな 氏名	いりえ しほ 入江 志保	学部 学科	理学部物理学科	学年	3年
ふりがな 共同 研究者氏名	たかみ さやか 高見 彩華	学部 学科	理学部化学科	学年	2年
					年
					年
アドバイザー教員 氏名	玉城 明子	所属	人間科学研究科		
研究課題名	総合的な探究の時間における高等学校から求められる大学生サポーターの役割 —大学生サポーターによる探究活動支援への教員からの評価から考える—				
研究成果の概要	研究目的、研究計画、研究方法、研究経過、研究成果等について記述すること。必要に応じて用紙を追加してもよい。（先行する研究を引用する場合は、「阪大生のためのアカデミックライティング入門」に従い、盗作剽窃にならないように引用部分を明示し文末に参考文献リストをつけること。）				
<p>1. 研究目的</p> <p>研究代表者、共同研究者は本学学生有志による団体、高大連携教育団体 SUIT（以下 SUIT）に所属しており、大学生サポーターとして連携している高等学校での探究活動（「総合的な探究の時間」や「課題探究」の授業）に参加し、高校生の探究活動のサポートを行っている。活動している大学生サポーター同士で話し合う中で、高校生への関わり方に差が生まれていること、大学生サポーターに求められていることがわかりづらくなっており、「なんとなく」で探究活動へのサポートが進んでしまっている課題があり、大学生サポーターの心理的負担につながっている状況があった。その負担を取り除くため、高等学校教員（以下教員）のニーズをもとに、大学生サポーターに期待されている関わり方を明らかにする必要があると考えた。本研究では、藤井ら（2020）が提案する大学生サポーターの望ましい関わり方を参考に 2021 年度から高等学校に継続的に「探究活動」への大学生サポーターとして支援を行ってきた高等学校での活動をもとに、大学生サポーターの役割として「アドバイザー」、「TT」、「コメンテーター」（語の定義は 5. で後述。）という 3 点に着目して、総合的な探究の時間における高等学校から求められる大学生サポーターの役割について明らかにする。</p> <p>2. 研究計画</p> <p>7 月：事前意識調査「探究活動」サポートに関するインタビューの結果を要約し、大学生サポーターがサポート時に大切にしていることやどんなことに対して心理的負担を感じているかの視点で分析、 8 月：アンケート項目の作成と実施、教員へ大学生サポーターの支援の実際についてアンケート調査、 9 月：インタビューの実施（半構造化インタビュー）①8 月のアンケートの回答のうち、理由などについて追加調査。②大学生サポーターが留意している点や心理的負担を感じている点について調査。 10 月：教員の「探究活動」へのとらえ方を分析。11 月・12 月：研究のまとめ</p> <p>3. 研究方法</p> <p>一点目に、大学生サポーターに対して行った「探究活動」サポートに関するインタビュー結果から、各校でのサポートでの留意点と心理的負担を感じている点を確認した。二点目に、大学生サポーターが探究活動・課題研究のサポートを行っている高等学校 5 校の教員 7 名に対してアンケート調査を実</p>					

施した。各高等学校 5 校における探究活動とサポートの概要は右表のとおりである（表 1）。A・C・D 校は 1 名、B・E 校は 2 名の教員を対象にアンケートを行う。③アンケートを行った教員に対してインタビュー調査を実施。B 校は 2 名の教員が同席した状態でインタビューを行い、それ以外の A・C・D・E 校は教員 1 人ずつに対してインタビューを行った。

表 1 研究対象校での探究活動・サポートの概要

学校名	探究活動での主なテーマ	サポート体制	特定のクラスへのサポートの頻度
A 校	地域課題の解決	オンライン	年 3～4 回（不定期）
B 校	地域課題の解決、または部活・教科に関する疑問	対面	週 1 回
C 校	社会課題の調査、または実験を伴う理系研究	対面	週 1 回
D 校	企業・行政の課題解決（PBL 形式）	対面	週 1 回
E 校	社会課題の調査	オンライン	週 1 回

4. 大学生サポーターへのインタビュー結果（詳細は添付資料参照）

大学生サポーターが留意している点や心理的負担を感じている点は以下の 7 点（①高校生に意見を提案すること②課題に対する専門知識の有無③リモート環境でのサポート④高校生と関わる際の姿勢⑤高校生のモチベーションの引き出し方⑥探究活動のクオリティ⑦サポートの評価）の categories に分けられた。

5. 教員へのアンケート結果とインタビュー結果（詳細は添付資料参照）

本研究でのアンケート項目は藤井ら（2020）の研究で「大学生サポーターの望ましい関わり方」として提案された「アドバイザー」、「TT（Team Teaching）」に、本研究で新たに「コメンテーター」を加えた 3 つの役割を取り上げて作成し、以下のよう

表 2 本研究における分析視点の語の定義

アドバイザー	高校生が探究活動を行っていく上で、大学において研究活動を行っている立場から、課題設定や論文指導などにおけるアドバイスをを行っていく役割。
TT	教員とともに授業計画の段階から参与する関わり方。単発あるいは短期的に「探究」の授業に参加するのではなく、カリキュラム作成の段階から中長期的に参加する役割。
コメンテーター	中間発表会や最終発表会で、高校生の発表について講評などを行う役割。

6. 考察

6.1 探究活動に大学生サポーターが入る前の懸念点を受けて、大学生サポーターはどんなことに注意すべきか（表 3）

大学生サポーターが探究活動に参加するに際して、継続的に活動時間を確保できる確証がないという懸念が多く挙げられた。大学生サポーターの継続的な確保を大学生個人で行うことは当然難しく、活動できる大学生の人数を増やす工夫が必要であるといえる。活動人数の確保については大学や学生団体などが大学生の募集を行い、学校とのやり取りを行う体制を構築することが好ましい。

表 3 大学生サポーターへの懸念点（アンケート結果からの抜粋）

【選択肢】	【回答数】
大学生サポーターが継続的に確保できる確証がない	4
大学生サポーターと連携をしようとする教員がいない	1
大学生サポーターを呼び込むための経費がない	1
大学生サポーターへの連絡が教員の負担となる	0
その他	0

6.2 「アドバイザー」の役割として求められていること

「高校生との年齢・立場が近いこと、打ち解けやすい」、「高校の教員だけで対応するよりも高校生一人ひとりに細かいアドバイスができる」の 2 点は大学生サポーターの有効性として多くの教員から確認された。高校生が自身の意見を述べる機会が多くある探究活動では、年齢の近い大学生サポーターの存在が高校生の発言しやすさにつながっているといえる。藤井らの研究で提案されていた「アドバイザー」という役割の有効性が、実際の活動を通して示されたと言える。また、本研究で大学生サポーターが「アドバイザー」として探究活動に参加する中で最も求められていたことは、大学生サポーターと高校生、そして教員との意見交流の必要性であった。大学生サポーターが探究活動に「アドバイザー」として参加する際には、目の前の生徒の実態に合わせた探究活動の状況について、高校生や教員に伝えることが必要である。教員からの「大学生サポーターが必ずしも探究活動に関する深い知識や経験を持っている必要はないと考えていたが、実際の活動の様子から探究活動に関する知識や経

験があれば良いと感じた」との意見から、活動前に大学生サポーターが探究活動に関する勉強会などで学ぶことでサポートの質を高めることにつながっているといえる。実際に大学生サポーターへのアンケート結果でも「勉強会で得た知識はサポートの中で役立っている」という回答が見られた。最後に、教員は「整理・分析を行うとき」に最も大学生サポーターに「アドバイザー」として関わってほしいと考えていることがわかったが、教員によって求めている関わり方は異なっていた。したがって、高等学校の探究活動の方針によって大学生サポーターが関わるべき場面が変わってくるため、大学生サポーターは年度始め等に連携校の教員と具体的にどのような場面での活動が望まれているかの確認をして活動の方針を共有することが求められる。

6.3 「TT (Team Teaching)」の役割として求められていること

アンケート結果で教員の半数が大学生サポーターに「TT」の役割を任せていないと回答している。大学生サポーターに「TT」の役割を任せていない主な理由は、探究活動の年間カリキュラム作成を早い時期に行うため、高等学校と大学生との連携が難しいからであった。大学生がカリキュラム作成に関わるためには、サポートを行う大学生グループとカリキュラム作成をする大学生グループを分けたり、連携校に早めに連絡をしたりするなどの、高等学校との密な連携が欠かせない。藤井ら（2020）が研究を行った年度は高等学校新学習指導要領「総合的な探究の時間」がスタートした時期であったため、大学生が関わることで探究活動の担い手の一員となるという「TT」としての役割も考えられた。しかし現在は、「総合的な探究の時間」の必修化から数年経ち、探究活動の実施が一定それぞれの学校、教員によって進められてきた。したがって「TT」の役割としては、校内での組織体制で実施されていることが多い。このような状況の中で、大学生サポーターが「TT」として探究活動に関わるには、探究活動を進めるための手法や形式を熟知していること、探究のプロセスを知っていること、アドバイザーと同様に自分の意見を述べるスキルが求められる。今後「総合的な探究の時間」を高校生時代に経験してきた大学生サポーターがより増えていく一方で個人の経験の差は大きくなると予想される。よって大学生サポーターは、今後も活動前に探究活動を進めるために有効な手法や形式を学び、探究のプロセスに合わせた関わり方を知ることはサポートの質を高めるために必要であるといえる。

6.4 「コメンテーター」の役割として求められていること

アンケート結果から、コメンテーターという役割の有効性は大いに確認できたといえる。藤井ら（2020）が提案する高校生との関わり方の中にコメンテーターは定義されていないが、「総合的な探究の時間」での探究活動が進むにつれて、必要性が高まってきた役割だと考えられる。コメンテーターの役割を担うにあたって大学生サポーターに求められていることは、現状での改善点や次のステップを問うような建設的な質問を行うことや、質問の行い方を知っていること、質問やコメントを通して授業に積極的に参加することであった。質問の質は場数に比例するかもしれないが、質問の行い方は場数によらず学ぶことができる。高等学校の探究成果発表会等に外部の大学生が参加できることもあり、大学生が担う役割としてコメンテーターが多い。探究活動にかかわろうとする大学生はコメンテーターのスキルを身につけるために積極的に参加することも方策の一つであるといえる。

6.5 新たに提案される大学生サポーターの役割

藤井ら（2020）は、大学生サポーターの役割として「ヘルパー」「アドバイザー」「TT (Team Teaching)」「登壇者」「評価者」の5つを提案していた。本研究では「ヘルパー」「登壇者」「評価者」の役割を求める意見は得られなかったが、「登壇者」「評価者」の役割を大学生サポーターが担っていることもあるため、連携校の教員と相談しながらこれらの役割を担うべきかを決めていく必要がある。

教員が求めるアドバイザーの役割として、E校『進路選択、大学生自身の研究テーマの選び方や論文執筆、大学生活についてなど』との回答もあった。今後それぞれの教員と相談をすることで、必要

であれば探究活動以外の面でのサポートも考える必要性が見られた。また、D校では、「ファシリテーター」の役割も求められていた。これは、藤井ら（2020）が提案する大学生サポーターの役割には含まれていなかったが、大学生サポーターの役割として本研究で新たに「ファシリテーター」として生徒と同じ目線で議論を活性化すると定義する。D校からは、「大学生サポーターに『教員がやりにくい役割』を期待している。教員はティーチャーとしての立場が強く、生徒からは『監督者』と見られるため、ファシリテーターとしての役割を十分に果たすのが難しい。その点、大学生は生徒と対等な立場で意見を引き出し、議論を活性化させる役割を担うことができる。これは活動を進める中で強く感じたことであり、大学生に特有の価値だと認識している。」との語りがあった。他の高等学校での「ファシリテーター」の役割の必要性は、本研究では未調査であり、今後の課題とする。

6.6 リモート環境でのサポートについて

A校、E校は探究活動の時間にリモートでのサポート体制をとっている。教員へのインタビュー調査より、どちらの学校でも対面でのサポートが好ましいと思っているが、時間的・地理的問題により、リモート環境でのサポートが暫定的に最適な手段となっていることが分かった。しかし、大学生サポーターからはリモートでのサポート体制への不満が出ていた（大学生へのインタビュー結果を参照）。大学生サポーターは、高校生との双方向性を重要視しており、高校生の思考が可視化されることを求めている。このことより、探究活動での決定事項のみを記入するのではなく、議論中のメモ書きを残しておけるような教材を使用し、それを大学生サポーターに共有することが提案できる。

7. まとめ・今後の展望

本研究の成果としては以下の4点が挙げられる。①大学生サポーターの実際のはたらきから、「アドバイザー」、「TT (Team Teaching)」、「コメンテーター」という役割の有効性を確認できた。②大学生サポーターの役割として、新たに「ファシリテーター」の役割が求められている。③大学生サポーターと教員が探究活動で難しいと感じている部分は同じ傾向が見られた。④大学生サポーターに求める動きは高校によって違うので、大学生サポーターはどのように活動していくかを教員と綿密に話し合う必要がある。特に④について、探究活動を通じてどんな生徒に育ってほしいかは学校によって異なり、それに応じて大学生サポーターに求められる動きも異なっていた。よって、大学生サポーターが探究活動に参加する際に、どのような動きが求められているのか教員に確認することが必要である。このときの確認事項は以下の3点（①高校生の今後の動きに対して助言を行う際、大学生サポーターはどのような視点で行うことを求められているか（例：生徒の思考を整理することにとどめて、具体的な案は出さない/具体的な案を選択肢として複数出す/具体的な案を1つ出す）②生徒が行う探究活動に対して、大学生サポーターは専門知識を持っておくべきか。③探究活動へのモチベーションが低い生徒に対して、大学生サポーターはその生徒のモチベーションを高めるために積極的に働きかけるべきか。）が有効である。また、今後の課題は次の2点である。一点目は、経年変化を追うために大学生サポーターの有効な役割についての調査を行うことである。高等学校の「総合的な探究の時間」は学校間で実情はさまざまであり、数年後にはその内容や育てたい生徒像など、求められる大学生サポーターの動きも変化すると予想される。二点目は、大学生サポーターが実施したいことについて効果検証を行うことである。今回は、高等学校でのニーズに焦点を当てて教員に調査を行った。大学生サポーターが探究活動のサポートを通して経験したいこととの比較は行わなかった。本研究の成果と課題をもとに、大学生が探究活動に関わる意義や効果的な方法、懸念点をより明確にしていきたい。

参考文献[1] 藤井拓海, 操谷悠希, 立野瞳, 滝川陽稀, 松田祐一, 榎本直紀, 大岡亜美. “大学生による「探究」への効果的な関わり方の研究：大阪府北部の高等学校における実態調査から考える”. 令和2（2020）年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書. 2021.